

GH 秀句鑑賞 (品女俳句に学ぶ)

目次

1	草引きし軍手の中の指きれい	5
1.1	波出石品女	5
2	卓涼し献立表をとばしもし	5
2.1	波出石品女	5
3	寝すごして葱をきざめる慌てぶり	6
3.1	波出石品女	6
4	紐が切れ発止と落ちし簾かな	6
4.1	波出石品女	6
5	暑さとは反対色を着て居りし	7
5.1	波出石品女	7
6	暑に耐えてかなしみに耐えがたきかな	7
6.1	波出石品女	7
7	洗ひ髪顔をはなれて吹かれけり	8
7.1	波出石品女	8
8	西瓜提げきてにこにこと玄関に	8
8.1	波出石品女	8
9	叩かれて落第したる西瓜かな	9
9.1	波出石品女	9
10	白靴のよろこぶやうな若さ欲し	10
10.1	波出石品女	10
11	泳ぎ子の走り抜けたる忌垣かな	10
11.1	波出石品女	10
12	学僧と噂の女との端居	10
12.1	波出石品女	10
13	若竹の若さと我れの若さかな	11
13.1	波出石品女	11

14	冷奴こんなによろこばれしとは	12
14.1	波出石品女	12
15	ステンレス流しに映る顔涼し	12
15.1	波出石品女	12
16	暑に耐へてをる病人の瞳かな	12
16.1	波出石品女	12
17	ひつぱつてひつぱつて水着ぬがせけり	13
17.1	波出石品女	13
18	垂らす足闇に突込む端居かな	13
18.1	波出石品女	13
19	紹介をいきなりされし汗を拭く	14
19.1	波出石品女	14
20	噴水の女神に向きて煙草吸ふ	15
20.1	波出石品女	15
21	サンダルの指うごきゐる女かな	15
21.1	波出石品女	15
22	気を反らすことも看護や金魚玉	16
22.1	波出石品女	16
23	おくれ来て今からつぼの避暑の宿	16
23.1	波出石品女	16
24	白靴の夕闇蹴ってもどりけり	17
24.1	波出石品女	17
25	髪洗ひつつ泣き伏してしまひけり	17
25.1	波出石品女	17
26	意地でのむビールの彼を知りにけり	18
26.1	波出石品女	18
27	梅雨菌大団結をもくろめり	18
27.1	阿波野青畝	18
28	一隅を照らす願ひの安居かな	19
28.1	阿波野青畝	19
29	影法師わななきこぞる薪能	19
29.1	阿波野青畝	19
30	梅雨の人パチンコ盤の裏に居る	19
30.1	阿波野青畝	19

31	鈴虫の数は減れども昂ぶりぬ	20
31.1	波出石品女	20
32	白涼し黒なほ涼し夏衣	20
32.1	波出石品女	20
33	蛇つかみたる汝の手を嫌ひけり	20
33.1	波出石品女	20
34	暑に耐ふる力を得たり虚子百句	21
34.1	波出石品女	21
35	病人の地獄と嘆く西日かな	21
35.1	波出石品女	21
36	桃はむき易しとナイフ使はずに	22
36.1	波出石品女	22
37	塗香してゐるまに汗のひきにけり	22
37.1	波出石品女	22
38	噴水の大円柱となりにけり	22
38.1	波出石品女	22
39	高校生大噴水を占領す	23
39.1	波出石品女	23
40	風鈴のよく鳴る芦屋住まひかな	23
40.1	波出石品女	23
41	暑に負けてならぬ献立つくりけり	24
41.1	波出石品女	24
42	裁屑を持ち去つてゐる風涼し	24
42.1	波出石品女	24
43	彼の意にしたがひがたき端居かな	25
43.1	波出石品女	25
44	抓むとは指三本や草を引く	25
44.1	波出石品女	25
45	向日葵に汝等と見下ろされけり	25
45.1	波出石品女	25
46	反対に歩む廊下や昼寢覚	26
46.1	波出石品女	26
47	炎天にのみさらされて救護班	26
47.1	波出石品女	26

48	熱いもの食べても梅雨の寒さかな	27
48.1	波出石品女	27
49	大阪に行かねばならぬ暑さかな	27
49.1	波出石品女	27
50	全身が水鉄砲の的なりし	28
50.1	波出石品女	28
51	うなじ打ちたる滴りの恐怖かな	28
51.1	波出石品女	28
52	立暗みすくなほりまた草を引く	29
52.1	波出石品女	29
53	とぐろ巻く笹の十六ささげかな	29
53.1	波出石品女	29
54	送りあふ団扇の風や僧と俗	30
54.1	波出石品女	30
55	押へられゆがむ乳房や髪洗ふ	30
55.1	波出石品女	30
56	わたしの匂出て来い出て来い書を曝す	30
56.1	波出石品女	30
57	禅僧を働き蜂にたとへたり	31
57.1	波出石品女	31
58	全身をゆさぶる曲や籐椅子に	31
58.1	波出石品女	31
59	透けて見えある縫代や単物	32
59.1	波出石品女	32
60	貧しさを隠さぬ僧の夏炉かな	32
60.1	波出石品女	32
61	泳がざる教師八方睨みかな	32
61.1	波出石品女	32
62	雑魚寝させられたる枕明易し	33
62.1	波出石品女	33

1 草引きし軍手の中の指きれい

1.1 波出石品女

懸命に庭の草引きをした。はいていた軍手の指先は土で汚れている。一区切りついたので一服しようと軍手を脱ぐとなかから出てきた指先は全く汚れておらず一瞬違和感を感じた。軍手の表面の汚れと綺麗なままの指との対比に心が動いたのである。汚れた軍手と綺麗な手とを並べ見て嬉しそうに笑っている幼子の顔が浮かぶような、そんな気分がある。つまり作者自身がそのような感覚を持っていないとこのような句は授からないのではないかと思うのである。(みのる)

- 軍手は泥だらけだったけれど脱ぐと中の指は意外にきれいね、とその発見が一句になったのですね。子供心を持っていないとできない句ですが、そのような精神が欠けていると鑑賞もむつかしいです。憧れはあります。(よし女)
- 草引きは主に関西で使われる言葉だそうです。草取りとは詠まれてないので同じことと思いつつ引いてみました。軍手が汚れているのでぬいだ時の驚きと感謝、指きれいで白い手と指が浮かびちょよとした艶っぽさも感じました。(ひかり)
- 今は家庭菜園されてる方も完全武装で日焼け等感じられません。軍手はずし白い手で冷たいお茶でも飲んで草引きの満足感を味わっておられるのです。(満天)
- ここのところ私も日課のように軍手をはめて草引きをする。綺麗な指であっても一応石けんをつけて洗ってしまう。軍手を有りがたいと思う気持ちはあるが素直に喜んで一句に仕上げる感性に感心を致します。(あさこ)

2 卓涼し献立表をとばしもし

2.1 波出石品女

献立表を職場の食堂のテーブルにおいてあるそれだとするとあまり涼しい雰囲気がない。飲食店などのテーブルの上に立ててあるメニューでもない。なぜなら「倒しもし」ではなく、「とばしもし」だからである。そこでコース料理などのお品書きで、その犯人は風ではないか考えてみた。となれば、屋外かもしくは半屋外という設定になる。推敲の段階で「風涼し」とするか「卓涼し」とするかで随分迷われたのではとも思う。「風涼し卓の献立表とばす」あたりが原句であったかも知れないが、「とばしもし」と表現することで風を省略した。さらに「とばしもし」の「も」は、涼しい要因がその他にもあるのだということを示唆しているように思う。一読、川床料理などのシーンを連想したが、「川床涼し」ではなく「卓涼し」なので、野外のカフェテラス、あるいは滴るような緑の景へ窓を全開した避暑ホテルの食卓というような設定である可能性のほうが高いかも知れない。(みのる)

- 避暑ホテルの食卓という設定が私にはピッタリきます。涼風もご馳走ですよ…(よし女)
- 品女さんのご家庭の食卓の景かと詠みました。栄養満点の色とりどりの献立を考えたが、最終的には美味しく冷たいお料理を二、三品、でも食卓は夏らしく涼やかでも豊かに整ったことでしょう。(かず)
- 山荘で昼餉を頂いたとき全開の窓からの溪の風に同じような経験をしたことがあります。しかし句にはなりません。卓涼しとされたところが素晴らしいです。(ひかり)
- 山のホテルに着き、まず温泉に入って部屋に用意された料理の前に窓を開け涼しい風を総身に…献立表が飛んでももう少し風の御馳走を～(満天)
- 「とばしもし」の「も」で、卓の上に置かれた涼しげで美味しそうな料理、涼風やせせらぎの音まで聞こえてきそうです。(さつき)

3 寝すごして葱をきざめる慌てぶり

3.1 波出石品女

猛スピードで朝食の味噌汁用の小葱を小口切りしている様子が目に浮かぶ。不覚にも寝過ごしてしまったのだ。目覚まし時計までセットして万全に備えていたのにうっかり二度寝でもしたのであるだろうか。家庭の主婦なら誰でもこんな体験があると思う。それにしてもこんなときふつうなら目玉焼きとトースターとインスタント珈琲か牛乳で間に合わせてごめんなさいというパターンだと思うのに、作者は律儀に味噌汁とご飯にこだわって準備している。平成の主婦と昭和の主婦との違いかも知れない。(みのる)

- このお句は春眠の雰囲気がありますね。ですが葱を刻むとの措辞で冬の句と捉えるべきなのでしょう。私は味噌汁の食材にするものはすぐ使えるように細かく刻んで冷凍します。なまけもの?(よし女)
- 慌てぶり…の措辞が全てを物語っていると思います。家族に謝りながらの支度、でもちゃんとネギを刻んでお味噌汁の準備ができました。いい奥さん、いいお母さんですね。(ひかり)
- 一読朝の味噌汁だとわかる。形はどうでもいい兎に角早く刻んでいる、その最中に自身の慌てぶりが句になったのだろう。臨場感があります。(うつぎ)
- 嫁いで間もないお嫁さんを想像しました。朝食の準備もほぼできている所へ起きてきてしまった若嫁さん、慌ててしまって葱もうまく切れない。その姿が又初々しく可愛くて、にこにこ見ている姑さん。明るい家族の朝のキッチンを思いました。(菜々)
- 朝寝坊から覚めて慌てて葱をきざんでいる。いくつかの大事なものを抜いて省いてあるわけです。青畝先生の省略の妙を感じられる句だと思います。(あさこ)
- 我が家も朝は必ず和食です。刻んだ葱はタッパーに入れて何時でも使えるようにしています。大事な薬味にと慌てて切り、不揃いになったり慌たしい俎板の音まで聞こえてきます。(満天)

4 紐が切れ発止と落ちし簾かな

4.1 波出石品女

風を通し、日差しを遮るために、戸障子はずしてこれを掛ける。日本古来の夏の風情である。永年使ってきたお気に入りの古簾だったがついに寿命が尽きたようだ。機嫌良く風をいなしているように見えていたのが、次の瞬間バサッと崩れ落ちたのである。どうやら紐が劣化していたのに気づかなかったようだ。「発止と」の措辞によって一瞬の出来事であることを連想したがその意味を辞書で調べると、「堅いものと堅いものとが打ち当たるさま」「矢が飛んできて突き当たるさま」とある。用法として必ずしもの確な形容ではないようにも思えるのに妙に納得できるところが不思議で、ある意味ことばは魔術でもあると納得した。(みのる)

- 簾の上下の竹は物に当たると結構大きな音がします。発止の措辞で作者の驚きがよくよくわかります。横になっていたりしたら尚更ですね。(よし女)
- 古簾の紐が弱ってきていたのには気づいていたが、そのうちにそのうちにと先延ばしにしていた。しかし今日の風で見事に落ちてしまった。簾の怒ったような音に少し申し訳ない気持ちをもたれたのではないかと思います。(ひかり)
- 何年も使った簾、これだけ痛んでいた紐では切れて落ちたのも道理と啞然としながらも諾っている作者を想像しました。(うつぎ)

- 発止という措辞が潔さを表していると思います。(ぼんこ)
- 紐が切れ残ってぶらさがっているのではなく、発止と落ちてしまった簾に作者は潔さを感じられたのでしょうか。”発止”が効いています。ひょとして人生のあり方を重ね合わせておられるのでしょうか。そんなことを考えました。(よし子)
- 紐が切れるくらい古くなった簾は汚れて重いことでしょうか発止で大きな音と作者の顔の表情まで見えてきます。(満天)

5 暑さとは反対色を着て居りし

5.1 波出石品女

正直言ってぼくにはお手上げの句なのですが GH 女性軍のみなさんは如何でしょう。色の分類で言えば「暑さ」に属するのはダーク系かと思う。その反対色ということは白とかそれに近い淡彩色を着ているということになる。でもそれでは常識的で面白くない。夏服の人波の中に喪服の一と屯を見つけて詠まれたのであろうか。そうだとしてもやや回りくどい写生のように思える。町ゆく人々はみな白一色、ちょっとあまのじゃくに反対色で目立つおしゃれをしてみたという遊び心なのだろうか… などなどあれこれと堂々巡りしてみるが鑑賞纏まらず降参です。(みのる)

- 暑さは熱さにも通じると思う。夏の太陽を思わすようなエネルギッシュな色合いとは反対の地味な沈んだ色を着ていると言う。そういう気持ちにさせる何かがあったのでしょうか。(うつぎ)
- 居りしの下五がきっちりしていますね。作者自身がまとっておられる喪服を連想しました。(よし女)
- 暑さとは反対色というのは、うだるような暑さに心が沈んでいると心の内側をいっておられるのではないかと思う。それゆえ深い紺色か黒の静かな色を纏って自分を客観的にみておられるのではないのでしょうか。(ひかり)
- 寒色と暖色。色はともかくとして、朝出かけるため何気なく袖を通した洋服。それが涼しそうな色合いなのに気づき、意識しないままそれを選んでいた事が自分でもおかしくもあり、納得でもあったのではないのでしょうか？それほどに外は朝からぎらぎらの日射しだったのでしょ… 事実だけでこんなに気持ちや情景が表現できるとは。(菜々)
- 原色の色は総体に暑苦しくシックな色合いは涼しさを感じる気がします。この句のなかの色は淡い感じの色のように感じました。(ぼんこ)
- 暑さとは反対色。この句を読んだ人は、どんな色だろう？ と、いろいろ想像してしまいます。白なのか黒っぽいのか。それは読者にまかせるといふ詠み方が心にくいばかりです。なんでもない事をさらに詠まれて、しかも??と考えてしまう。うまい詠み方だと感心致しました。(よし子)
- 着る物は人によってずいぶん好みが変わりますが、暑さとは反対色であれば涼しさの感じられる水色あたり？ 黒であればうす物のシースルーあたりかなと…。(満天)

6 暑に耐えてかなしみに耐えがたきかな

6.1 波出石品女

耐えがたいほどのかなしみといえば、親しい友人か家族との死別ではないかと思う。逆縁となればなおさらである。季語が動くかどうかを論じたくなる作品かも知れないが、ぼくは、このかなしみが猛暑によって引き起こされた突然の出来事ではないかと考えるのである。昨今の異常気象は、寒さより暑さが原

因で亡くなる老人が多いと聞く。予告された寿命であればある程度の心の準備が出来るものだが、突然の別れは誠に耐えがたいものである。品女さんのナース時代の体験句かも知れない。患者や家族に感情移入していたのでは仕事にならないと割り切る人も多いと聞くが、品女さんはそれが出来ないお人柄である。(みのる)

- 暑には耐えられてもこのかなしみは耐えがたし。しかしながら耐えねばならぬ…自分自身に言って聞かせておられるのでしょうか。人生にはこのような時って必ず訪れますよね。(よし女)
- この悲しみに比べれば暑に耐えるなど何でもないこと。それだけ深い悲しみである。と言われてるように思います。(うつぎ)
- 耐え難きかなしみとは大事な人とのこの世の別れしかないですね。悲しみはいづれ少しずつ癒されていきますが、寂しさはいつまでも募ります。この世の惜別は悲しいですが天国でも再会を信じたいです。(ひかり)
- 知恩院のお坊様は、何れ貴方も同じ仏様の胸に入るのだから急ぐ事はないと言われました。同じ様に死を迎えるのです。それまで良く気遣いしてくれた事を思い感謝しつつ耐えねばなりません。残された者の宿命でしょう。(あさこ)

7 洗ひ髪顔をはなれて吹かれけり

7.1 波出石品女

ヘアードライヤーの風ではなくある程度タオルで水気をとったあと縁側に坐して涼しい自然の風にふかれながら髪の渇くのを待っている一女性の姿を連想した。まだ顔のあたりにへばりついていた数本のほつれ毛が風に吹かれて顔を離れた瞬間の感覚を詠んだ。男には分からない女性独特の繊細な感性なのだと思う。パーマを掛けたショートヘアではなくてナチュラルなロングヘアを想像する。(みのる)

- 慌ただしくドライヤーで髪を乾かす日常生活から離れた旅の宿のひとつを想像しました。顔から髪が離れていくと自分の体の一瞬の心地良さを捉えられたところが凄いなあと思いました。(さつき)
- 洗い髪が自然に吹かれるまでに乾くには時間がかかるし顔をはなれての措辞から単純にドライヤーか扇風機で乾かしている情景と解釈しました。乾くほどにさらさらと軽くなり洗髪後の心地よさが吹かれけりでよく出ている。(うつぎ)
- 浮世絵展を見たばかりなので一重の和服を着流した女性が浮かびます。洗い髪が顔を離れての細やかな観察がさすがですね。(よし女)
- これから暑くなると髪の長い人は洗うのが結構大変です。年をとると面倒なことを避けるようになるのでどんどん髪が短くなっていきます。洗い髪を風になびかせる気持ちよさ、見ている人も素敵な黒髪について見惚れてしまいます。浴衣を着て川堤でも散歩しておられる姿を連想しました。(ひかり)
- どんなことでも句にしてしまう品女さんの感性のすばらしさには敬服、見習いたいものです。洗髪と乾かしを終えた女性が髪を風に委ねて解放感を味わっているのだと思います。(ぼんこ)

8 西瓜提げきてにこにこと玄関に

8.1 波出石品女

来客を告げるチャイムが鳴ったので急いで玄関へ出てみると、お裾分けにと自家製の西瓜を提げて持ってきてくれたご近所の好々翁の顔が…。日々の畑仕事で真っ黒に日焼けした顔からは白い歯がこぼれて

何とも言えない親近感がただよう。その優しい心遣いに感謝があふれるのである。もしみのる選だったら見落としていたのではと思うくらい平明に詠まれている。品女さんの句は、省略と平明の大切さを私達に教えてくれる。(みのる)

- どれもん漫画の一コマになりそうな楽しいお句ですね。子や孫に食べさせたい一心で西瓜を作る夫の様子を、子や孫の家で見ている気分になりました。(よし女)
- 父のことを思い出しました。にこにこと玄関に、まさにそのとおりでした。本当に西瓜の季語はうごかないですね。うつぎさんに同感です。(ひかり)
- 平明に徹したような句ですがこの西瓜は効いています。他のどんな野菜や果物をもってきて「にこにこと」には西瓜ほど適いません。渡す方も頂く方も読む方もにこにこです。(うつぎ)
- 「子供にも分かるような句」とはこんな句でしょうか。ま～るい西瓜と笑顔の取り合わせに私も思わず微笑みました。朝の玄関でのひとこまに日頃のお付き合いと爽やかなお二人のお人柄まで感じられます。(菜々)
- わたしらはなかなか句が出来なくて困っているのに、にこにこと客が現れただけで一句にしてしまわれる品女さんの感性に敬服いたします。きっと良く出来たあまい西瓜だったことでしょう。(あさこ)

9 叩かれて落第したる西瓜かな

9.1 波出石品女

西瓜は昔から手のひらでパンパンと叩いて、その音で見極めると言われてきました。よく完熟した西瓜は叩くとボンボン(BonBon)と澄んだ音で響き、未熟だとポンポン(PonPon)と高い音がするのですが、実際は慣れた人にしか聞き分けできないそうです。とにかくこの西瓜はまだ未熟だということではじかれました。落第したる…の措辞がうまいです。落第も季語ではと詮索するのは愚かで、季感を伴わない用法の場合は、季語にはなりません。(みのる)

- 審査は簡単、叩いて決める。一番良いものが合格、落第しても次の人に合格をもらえば買ってもらえる。おかしみもあり、救いもあり、厳しさもあり、これもまた人生...と西瓜の身になって思う。(なつき)
- 「私は落第なの？」と叩かれたスイカの音が聞こえそうです。夏休みには子供たち家族が帰ってくるから西瓜冷やしておかなくてはと、老夫婦がどれにしようかと選別中のようすかと思えます。冷たい井戸水で冷やされた西瓜をみんなで食べる味は格別です。(ひかり)
- 「叩かれて」と「落第」の言葉の取り合わせがただただ可笑しいです。何度も思い出しては一人笑っています。(さつき)
- まだ熟していないか棚落ちか、落第と言われればこの西瓜の臍をまげているような表情が見えてきます。擬人化した落第に大いに笑わせてもらいました。(うつぎ)
- 我が家では毎年自家用の大玉と小玉の西瓜を植えて、主人が親指と中指で弾いて熟れ方を聞き分けます。私は「これはまだ？あれはダメ？」と言うばかり。一番の悩みは鴉と狸。叩かなくても完熟度をよく知っています。掲句は出荷前の生産地でしょうか。初出荷の頃は棚落ちなどの落第や落ちこぼれがあるでしょう。落第の措辞が光りますね。(よし女)

10 白靴のよろこぶやうな若さ欲し

10.1 波出石品女

お祝いの席に出席するために身支度を調べ、白靴を履いて玄関先の姿見で確認しているときに感じた印象を一句に仕立てた。気持ちだけは誰にも負けないくらい若いつもりなのだけれど、容姿はいつまでも変わらずに居続けることは難しく、思わずため息が出るのである。この度の宴席のためにわざわざ新調したピカピカの白靴のようにも感じる。(みのる)

- 白いスニーカーをはいて吟行にでも行かれるのでしょうか。おろしたての靴に若い頃を思い出されて今の自分と比べられたのかもしれませんが。白靴のよろこぶような若さ、私も欲しいです。(ひかり)
- 靴屋で靴を選んでいる場面を想像しました。無難な色で履きやすい靴を選んでしまうけれど、あの棚にあるおしゃれな白い靴が喜ぶような「若さ」をふと羨んでいる作者を思い浮かべました。(さつき)
- 白靴は履くほうが嬉しく浮き浮きした気分になるのですが、白靴がよろこぶと逆に持って行ったところが斬新でこの句の手柄だと思います。私もこの句がわかる年齢になって来ました。(うつぎ)
- この一句大いに共感します。私はハイヒールはもとより白靴も履かなくなって久しいです。けれども靴にはこだわりがあり、とにかくにも軽くて歩きやすく転ばないようにがモットー。白靴が喜んでくれるようなとの言い回しが面白いですね。(よし女)

11 泳ぎ子の走り抜けたる忌垣かな

11.1 波出石品女

忌垣は、「いがき」とよむ。神社など神聖とされる場所の周りにめぐらせた垣のことで、むやみに乗り越えて中に侵入してはならないとされる。揚句の舞台は、海水浴場ではなく、海神を祀る小さな漁村の浜にある産土神社かと思う。地の子供達は自宅で水着に着替えてそのまま浜へ出て遊び、帰るときもまた濡れたままの姿で走って帰るのであろう。忌垣の中を通過はいけないことは家族から聞いて知っているのであるが、ここを通り抜けるのが近道なのである。吟行中にめざとくこの情景を見逃さなかった作者の手柄である。(みのる)

- 忌垣を通り抜けるのを大人にみつかるるとまた叱られるぞと飛ぶように走り抜けた子どもたちの一瞬の躍動感が目に浮かびます。何度叱られても海へと逸る気持ちを抑えることはできません。(さつき)
- いけないことはわかっているけど近道の誘惑には勝てず、「走り抜けたる」の措辞にうしろめたい気持ちが出ています。友達と誘い合って逸る心は海辺か川遊びにとんでいます。夏休みの一コマに会われ、ふと作者も子供の頃を思い出されたのでしょうか。(ひかり)
- 今から浜遊びに行く漁村の童たち。その機嫌よさと勢いが「走り抜けたる」で現わされています。逸る心は忌垣もなんのそので、神もお許しになることでしょう。作者の驚きと共に健康的な子供たちを誇る眼差しを感じます。(よし女)

12 学僧と噂の女との端居

12.1 波出石品女

学僧には学問にすぐれた僧、あるいは修学中の僧という意味があるらしい。修行中の僧が人目につくところで女性と居ることはないと思うので、ぼくは前者と見て鑑賞してみた。英雄色を好む・・ということ

ばがあるが、この学僧のところへ足しげく訪ねてくるというかねてからの噂の女性なのである。聞くところによるとあまり評判のよくない女だとか。お堂の広縁に坐し庭を眺めながら女は懸命に何かを訴え、学僧は黙してそれを聴いている。少なからず学僧を尊敬している作者はその顛末が気になってしかたがない。悪い噂が現実にならなければいいかと念じながら、心配そうな視線で遠見している作者が居るのである。(みのる)

- 端居の季語がじつによく合っている。噂の女という歌謡曲の題名のような言葉が耳に残る不思議な感覚の俳句だと思う。(なつき)
- 映画のワンシーンのようですね。不倫の恋の行方は如何あいなったのでしょうか。(ぼんこ)
- 噂の女といわれるととても魅力的な雰囲気伝わります。目を引くような艶やかな女性と若き学僧を感じました。その取り合わせが読み手にいろいろなことを連想させます。端居の季語がドラマのワンシーンを演出しています。(ひかり)
- 噂はあくまで噂であって本当は心根の純粋な女性であり、何か事情を抱えているのかもしれない。そんな女性の話を静かに聞いている学僧との端居の風景はひとつの短編小説にもなりそうです。(さつき)
- とかく噂のある女性と学僧と、「端居」の季語によって男女間に漂う切なさとか今現在の清々しさ、それを見ている作者の眼差しにも優しさを感じます。(よし女)
- 戒律を守り清浄な日々を過されている学僧ととかくの噂の女、対照的な二人の端居に滑稽を感じます。(うつぎ)
- ひとむきに修行している学僧と艶っぽい女に静かな時が流れる。巷では何かとうわさの多い女には心安らぐひと時であろう。どこかなつかしい「端居」という言葉。うわさの女にも学僧のように純粋な時があったであろうと作者は見えていたのでは…(菜々)

13 若竹の若さと我れの若さかな

13.1 波出石品女

若竹(今年竹)には勢いと瑞々しさがあるので、よく比喩として使われる。その若竹の若さと自分の若さを比べているのだが、決してうらやましく思って自身の加齢を落胆しているのではない。若竹の勢いに勝つことは叶わないけれど、日々精進して若々しい感性を保ちつつなお成長しつづけたいものだと願っているのである。若いという字をリフレインすることでリズム感を生むとともにその思いを強調している。(みのる)

- 若竹の青々として一目でわかる若さ、でも心の若さでは負けていませんよと品女さんの若竹に触発された気持ちがよく出ています。(ひかり)
- 若竹の若さに自分を重ね自己の感性の成長を願っている作者。自身の句作活動も心身ともに充実しているのでしょう。(よし女)
- 若竹の若さ、我の若さと対句で単純化され、力強い句になっている。すっきりと伸びた若竹の勢いに、私も負けてはいられない、まだまだこれからだと背筋を伸ばし颯爽している作者を感じます。(うつぎ)
- 日々いちじるしく成長する幼子の若さと私たちの若さとも言えるのではないのでしょうか。私たちも日々精進して若々しい気持ち保って過ごしたいものです。(ぼん子)

14 冷奴こんなによろこばれしとは

14.1 波出石品女

予告なしに家人が部下を連れて帰宅した。外では話できないプライベートな打合せでもあるのだろう。急いでお酒の用意をしなければならないのだが、あいにく酒の肴になるような材料の買い置きもなく買いに行っている時間も無い。苦肉の策で家人の晩酌用に買ってあった冷蔵庫のお豆腐で何とか繕った。ところが「なんと言ってもこの時期はこれが一番ご馳走ですよ。最高ですよ奥さん。」と大喜びされて、申し訳ないやらうれしいやら…といった心境である。(みのる)

- GHの吟旅で東吉野へいったとき宿のお豆腐の美味しかったことを思い出しました。暑い時期はシンプルな味のものがことのほか喜ばれます。さっとタイミングよく出されたので客の反応の大きさに品女さん自身も驚かれたのでしょうか。(ひかり)
- 薬味を添えて出しただけの冷奴に大層喜んでくれた。そのことに喜んでる句である。きつと気どらない作者のお人柄や持て成しの心に喜ばれたのではと想像が広がります。(うつぎ)
- 何も考えずに読んで一瞬字足らずかと思いました。よくよく迎ると句またがりて575に納まっているのですね。お客が喜んでくれて、自身が慌てたけれど、ほっとしている気持ちをよくあらわしているようです。(よし女)
- 冷奴は角こそ大事とか。ありあわせとはいえ、四角にきれいに切られたお豆腐は涼しげでお客も思わずにっこり。これぞ「おもてなし」でしょか?(菜々)

15 ステンレス流しに映る顔涼し

15.1 波出石品女

ピカピカに磨き上げられたステンレス流しに映っている自分の顔が涼しく見えたというのである。水に濡れて作業中のステンレス流しでは鏡にはならないので、恐らく手入れのために懸命に磨き上げた直後、流しに自分の顔が鮮明に写っているのを確認して、そのできばえに大いに満足し思わず笑みがこぼれた瞬間であろう。日常の何でもないことをユニークな作品に仕上げてしまう品女調を非凡なテクニックだと決めつけて欲しくない。そうではなくて作者の感性がいつも幼子のように素直で研ぎ澄まされているからである。品女さんの俳句をも真似するのではなく、視点や感じかたを学んで欲しいと願う。(みのる)

- 最新のシステムキッチンのご覧になってのことと思います。鏡面磨きのステンレスで冷房の効いた展示場でのことだと思います。何もかもがピカピカの涼しさだったのでしょうか。(ひかり)
- 住宅メーカー展示場のシステムキッチンと見ました。新品ゆえステンレスの流しに、細部は省略した自分の顔が映り涼しく感じたという連想も出来るように思います。(よし女)
- 流しをピカピカに磨いて爽やかな気分になっている作者が「映る顔涼し」でよく出ている。読み手も気持ち良くなりますね。(うつぎ)

16 暑に耐へてをる病人の瞳かな

16.1 波出石品女

作者がナースであるという先入観なしで鑑賞したいので、詠まれている対象はお見舞いにいった病人の入院患者が待合室で診察の順を待っている通院患者、あるいは長患いで自宅に臥せっている人かも知れな

い。最近の病院は冷房完備であるがこの時代はまだ不十分であったので闘病苦と暑さの両方に耐えるのは大変だった。口に出して愚痴をこぼしているのではなく虚ろな瞳が訴えているのである。詠まれている対象は本人ではないが、病人に同情している作者の優しい心情が見えてくる。俳句に於いては三人称をモデルに詠む場合でも作者の存在がわかる詠み方をしたい。(みのる)

- 瞳に着目されたのはやはりお仕事柄でしょうか。目は口ほどにものを言うの通り口にはだせなくてもこの暑さ、病人ならばなおのこと。早く涼しくなってほしい、つらいでしょうが頑張ってくださいね。作者の優しい思いが伝わってきます。(ひかり)
- 病人にとって夏は熱でもあろうものならほんとに大変です。瞳がすべてを語っている。涼しい風でも吹いて欲しい、早く良くなって欲しい作者の祈るような気持が感じられます。(うつぎ)
- 健康な者でも耐え難い夏の暑さに、身近な病人が必死に耐えている。しかし、その瞳からは悲壮な感じは受けず、戦っている病人から逆に耐えることを教えられているだと思いました。(さつき)
- 焦点を瞳に絞ってあるのがこの句の優れたところですね。病人や看取り人の心の動きが連想でき、暑に耐えることでその心境を強調しているようです。(よし女)

17 ひつぱつてひつぱつて水着ぬがせけり

17.1 波出石品女

母親が懸命に幼子の水着をぬがせている。もともと水着は身体にフィットさせるために伸縮性ある生地で作られているのであるが水に濡れると更に収縮して身体にひっつくので、脱がすとなるとなかなか容易ではないのである。自宅の庭でビニール製の小さいプールに水を入れて子供を遊ばせている平和な家族を連想した。水着ぬぎにけり…ではなく、ぬがせけり…なのでそのように鑑賞した。(みのる)

- 子供たちが騒いでプール遊びを楽しんだあと、さぁもうお終いお昼寝させなくては…と着替えを手伝う母親。水着は濡れると ひっぱってひっぱっての表現通りとても脱がせにくい。でも子供も母親も楽しそうな夏の一日です。(ひかり)
- ひっぱってのリフレインが、なかなか脱がせられない気持ちを表し効果的です。笑い声も聞こえてくるような… (よし女)
- なんでもない情景ですが「ひつぱつてひつぱつて」という措辞が効き斬新的な句になっています。(ぼんこ)
- ひっぱってのリフレインによってしかも仮名で書かれていることでちょっと手こずっている様子や子供への愛情が窺え愉しく鑑賞しました。字余りも効果的です。(うつぎ)

18 垂らす足闇に突込む端居かな

18.1 波出石品女

夕飯の準備も整ったので家人が帰宅するまでちょっと一休みと縁側にでてみるとあたりはもうすっかり夕帷に包まれている。しばらく腰を掛けて足をぶらぶら遊ばせ時折通ってくる涼風に癒やされながら無為の時間を愉しんでいるのである。今日一日のあれこれを思い出して反省したり、あるいは句の想を練ってあれこれと瞑想に更けているのかもしれない。さて、そろそろ家族が仕事から戻ってくるころ、主婦業に戻らねば… (みのる)

- わたしの両親の実家は共に農家でした。夏に行くと夕食後縁側で夕涼み。都会ほど明るくないので周りはすべて闇、まさにこの状態です。闇に突っ込む・・で暗さが強調されて田を渡る風、蛙の鳴き声も聞こえて来るようです。(ひかり)
- 子どもの頃、縁側に座って足元を覗くとあまりに高く暗くてドキドキしたことを思い出しました。(さつき)
- 端居してどうこうではなく「垂らす足間に突込む」と端居の姿勢だけが述べられていることに惹かれる。はっきりと情景が浮かび、クーラーも無かった昔の田舎の夕べを思い出させてくれる句である。(うつぎ)
- 久々の里帰り、母親と(父親)との端居で時々団扇が動きます。昔のこと、今の暮らし、未来像など会話が弾みます。外に漏れる部屋の灯りが庭をほのと照らすのですが垂らす足許は真っ暗。「垂らす足間に突込む」の措辞にどきんとしました。(よし女)
- 昔は暑さよけの為日が暮れると縁先や竹椅子に座り夕涼みをしたものです。そして日がどつとり暮れると足元は闇に包まれてしまいます。(ぼんこ)
- 足を闇に突込む、この表現はそのままではあるのですがなかなか思いつかない言葉で適切だと思います。季語の端居が又良く効いていますね。(あさこ)

19 紹介をいきなりされし汗を拭く

19.1 波出石品女

紹介したいひとがいるからと呼び出された。待ち合わせの場所に着くやいなやすぐさま紹介されたので、緊張のあまりドッと汗が噴き出したのである。お見合いと言うほどではないけれどそんな雰囲気も匂う。月下氷人なる人からあらかじめ話は聞いていたかも知れないが、世間話をするでもなくいきなりの直球紹介であったので心の準備が追いつかず動揺したのかも知れない。想像していた年格好のイメージよりも若々しいイケメンであったことも考えられる。(みのる)

- いきなり紹介されて汗をかくのは仕事関係ではなく素敵な異性だと思いました。どうして事前にひとこといっておいてくれなかったのかちょっと恨めしい気もありますし、もう少しおしゃれしてくるのだったにとの後悔もあります。(ひかり)
- 「いきなり」という措辞が狼狽の様子をよく表しています。(ぼんこ)
- 日常の会話なら「いきなり紹介されて汗をかいたわ」になるのでしょうか先に「紹介」と上五に据えて結句に「汗を拭く」ときちんと言句に収められているのが素晴らしいと思いました。(よし女)
- 女性に紹介された場面が浮かぶ。汗をかいているのは小太りの生真面目な男性。ポケットからハンカチを出してひたいの汗を拭っているのだろうか。拭うものを持っていて慣れた動きのようだから、汗を拭くような場面が多い人なのだろう。几帳面で真面目な性格なのだと思う。女性なら突然紹介されてドギマギした時は、汗が出るよりもじもと手先が動いたり赤くなったり、だろうか。イヤイヤ今時の若い女性は赤くなる場面もとんと見かけない。(みちほ)
- 爽やかな好青年を想像します。いきなり紹介されてドギマギしている様子が「汗を拭く」の一言に目に見えるようです。「されて」でなく「されし」に、ほほえましく見ている作者の温かい目を感じます。(菜々)
- 仕事関係の事務的な紹介ではなく人物としての紹介をされたのだろう。ちょっとしたお見合いだったかも知れない。お相手は一目で予想以上の人だ。私は大丈夫かしらと紹介された途端の汗と想像しました。一瞬の心の機微を「いきなり」と「汗」でよく現わされていると感心しました。(うつぎ)

20 噴水の女神に向けて煙草吸ふ

20.1 波出石品女

社会的に禁煙、分煙が厳しくいわれるようになり、愛煙家はパブリックなスペースでゆっくりと喫煙することが至難な時代となった。揚句の主人公もそうした迫害からエスケープして公園の噴水広場で心置きない寸暇を惜しんでいるのであろう。同僚や知人と目が合うことを避けて噴水の中央の女神像に向いて立っているひとりの営業マンの姿を連想した。満足に喫煙も出来ずストレスが溜まるうえにうだるような暑さとも戦わなければならない。流れる汗を拭きながら、ささやかな安息を得るのである。あたりに背を向けたこの姿勢が一番リラックスできるのであろう。(みのる)

- タバコを吸う人にとっては、肩身の狭い世の中になりました。喫煙はリラックスするための貴重なひととき、青空の下噴水を前にしてさぞおいしいことでしょう。喫煙者の背中中は邪魔をしないでくれといっています。(ひかり)
- 女神を真正面から崇められるこの公園の特等席の背もたれに腕を寄せ、ひとときの安らぎを求めているサラリーマンの姿が想像され、作者の夫への思いと重ねあわせたねぎらいの気持ちが感じられます。(さつき)
- 愛煙家にとって女神のお許しを得て心おきなく喫煙できる場所なのでしょう。束の間の安らぎを得た喜びが想像できます。(よし女)
- 噴水、女神、向きて、煙草、取り合わせがいいですね。想像が膨らみます。(みちほ)
- 昨今の世は何処に行っても愛煙家は肩身が狭い。噴水広場を憩いタイムの場としている人であろう。像である女神に「向きて」がユーモラスである。この句には語られていないが人間の非難がましい目が裏に隠されている。(うつぎ)

21 サンダルの指うごきある女かな

21.1 波出石品女

サンダルはメッシュ靴、白靴とともに夏靴の季語とされている。婦人用に素足にはくスマートなものが多く大抵は指先が見えているのである。最近は極彩のマニキュアなどでおしゃれをした女性もよく見かける。揚句はその指先だけに焦点を絞った。どんな場所でどんな状況下でどんなスタイルなのか等々の情報はすべて省略されていて鑑賞する側の連想に委ねているのである。指が動いているのは無意識なのか、あるいは他人の視線を感じて動いたのか… といろいろ想像はしてみるが女性心理を分析するのは難しく、男性としてはこのあたりまでの鑑賞が限界。(みのる)

- 電車に向かい合って座っている女の人それも若い人かしら。サンダルの先に出ている指がうごいていてなんか落ち着かない様子だけど、どうしたんだろうと訝っている作者。思わぬところに人の心がでるものなんですね。(ひかり)
- 電車で座っている若い娘さんだと思う。サンダルだと足先まで見えつい見とれていると指が動いている。音楽のリズムに合わせているようだ。若い人はいいなあとと思っている作者。省略が極められているがゆえに色々連想がひろがっていく楽しい句だ。(うつぎ)
- 通勤帰りの電車の中で目の端に動くものがある。見るともなしに見るとサンダルから見える指が動いている。視線を上げると軽快な涼しそうな服が見えた。通勤着はきっちりとして少し暑い。自分もあんな風に軽々と夏を過ごしたいもんだと思う。そういえばあの夏服を出しておこう。と、サンダルの指の動きを見た時から思いは変化して次々と動いて行く。これはほんやり過ぎず私の場合。作者は意識が動いていくことに気づいていてそのきっかけの瞬間を捉えた。(みちほ)

- サンドルは靴と同じサイズだとゆるんでくるので足をサンダルにあわせようと指が動くのか、それともイヤホンで聞いている音楽のリズムに合わせて指が動いているのか、後者のほうが楽しいですね。綺麗なマニキュアがしてある美しい足指を想像しました。(よし女)

22 気を反らすことも看護や金魚玉

22.1 波出石品女

句集では「看護」に「みとり」とルビがふってあった。「看取」ではないので十分に回復が見込める病人なのであるが、闘病生活が長引くと気が重く悪い方向ばかり想像して塞ぎがちになる。金魚玉涼しそうだね…と視点や話題を変えて少しでも気分が明るくなるようにと気配りしているのである。品女さんの職業がナースであったことを知っている人には、幼い子供の入院患者に優しく声を掛けている彼女の姿が連想できる。病院ではなく自宅で療養している病人だと鑑賞しても家族の思いやりが伝わってくるのである。(みのる)

- 病人の看護には気を反らすことはとても大事です。お部屋の眼の届くところにゆらゆら尾を翻して泳ぐ紅い金魚がいれば 気持ちも紛れます。みんなの気持ちがわかるのは、やはりお仕事がらでしょうね。看護をみとりとルビをふられたことにも配慮が感じられます。(ひかり)
- じっと病臥しているとついつい思考が堂々巡りし気分は落ちて来る。上手に話題を変えて気分を紛らわせてもらう。ポジティブな気分になると回復も早そうだ。それも看護なのです、と言っている。金魚玉は明るく透き通った感じでとても合う季語です。(みちほ)
- 季語の「金魚玉」がつかず離れずのいい感じでよく効いている。病人への細やかな気遣い、ふっとふられた目線の先に涼しげな金魚玉。病人は一時でも苦しみから開放されたに違いない。(うつぎ)
- 長い闘病生活のふさぐ気持ちを少しでも紛れるようにとのやさしい気持ちが金魚玉に表れています。(ぼんこ)
- まさにこの通りですよ。金魚玉の季語がよく効いていると思いました。(よし女)

23 おくれ来て今からつぼの避暑の宿

23.1 波出石品女

親しい仲間との吟旅を楽しみにしていたが突然の急用で出発時間に間に合わなかった。やむを得ず遅れてしまったので取り急ぎ宿へ直行したのであるが、句仇たちは既に吟行に出ってしまったようで、案内された部屋はもぬけの殻。何とか不参加という最悪の事態は回避できたという安堵感とちょっと出遅れてしまったという悔しさが入り交じっている。当時の作者はばりばりのナースであったので急患があったのかもしれない。吟旅と決めつける必要は無く、単なる親しい仲間との避暑の旅と解してもいいが、俳人として鑑賞するならば吟旅としたほうが実感がある。(みのる)

- 申し訳ないと思いつつ精一杯急いできたのに、あららみんなは何処へいったのかしら。どっと疲れが…でもまあいいか皆が帰ってくるまで一休みして鋭気を養おうと思っておられるのではないのでしょうか。避暑の宿なので私なら皆を待ちつつしばし横になります。品女さんはどうされたのかしら…。(ひかり)
- 間に合うかと急いで追い掛けて来たが宿はすでに空っぽ、夏のことだから皆じっとしてはいない。でも来られたことだけで有り難い。中七の「今」が作者の感情を語っている。(うつぎ)

- 漸く着いた避暑の宿。ほっとした気持ちと拍子抜けした気分が入り混じっており、早く仲間に会いたい心も伺ます。「今空っぽ」の措辞が良いですね。(よし女)
- 「今からつぽ」の表現に安堵感と無念さが出ています。「今」の使い方が効いています。(みちほ)

24 白靴の夕闇蹴ってもどりけり

24.1 波出石品女

この作品、一人称の句として鑑賞するか、あるいは三人称の句(お嬢さんがモデル?)として解するかで若干状況が変わってくるが、いずれにしても今日の外出はとても楽しい一日が過ごせて意気揚々というかるんるん気分で帰宅したことが想像される。もし三人称であるとすれば、「白靴の娘夕闇蹴ってもどりけり」になるわけだが、作者は字余りを嫌ってあえて一人称に詠まれたのではと思う。(みのる)

- 何度も読み返してみました。夕闇蹴って…は、やはり楽しいことかそれとも嬉しいこと。娘の足音をさとく聞き分けられる母親でしょうね。この後どんな報告が告げられたのでしょうか。朗報に会話の弾む楽しい団らんをむかえられたと想像します。(ひかり)
- 一家の主婦は帰宅する家族の足音でその日の出来事を推察するのでしょうか。「あの娘、きょうは白い靴を履いて出ていったけれど良いことがあったのね」と微笑んでいる作者が見えるようです。三人称の句だと感じました。(さつき)
- 最初この句を読んだとき「蹴って」の措辞で何か腹立たしいことか残念なことに遭遇しての感懐なのかと思いました。みのるさんの解説とは逆でした。句そのものは一人称と解釈しました。(よし女)
- 白靴、夕闇蹴ってだけで今日の愉しかったことを存分に語っている。コツコツとヒールを鳴らし余韻に浸りながら帰って来たのだ。一人称の句として鑑賞しました。(うつぎ)
- 白靴と夕闇の取り合わせがとてもいいと思います。夕闇蹴っての措辞に元気さと楽しい心境を感じました。(みちほ)

25 髪洗ひつつ泣き伏してしまひけり

25.1 波出石品女

髪を洗うのは四季を通じてだが、夏は汗で汚れやすく度々洗うので夏の季語となっている。男女とも洗うが女性の方が情緒がある。髪を洗っていると今日一日の出来事が走馬燈のように思い出される。悔しい思いなのか悲しい思いなのか、あるいは失恋であったかもしれない。人前では涙を見せまいと気丈にふるまって耐えてきたものが一気に噴き出したのである。(みのる)

- 品女さんの職業がナースだったことで、受け持ちの患者さんが亡くなられた日の出来事ではないかと想像しました。気丈に一日の仕事を終えたあと、一人っきりになれた浴室で患者さんを思い出し、泣き伏すほど泣いてまた前を向いて明日の仕事に向かわれたのでしょうか。人の生死にかかわる仕事の厳しさと温かさを感じました。(さつき)
- 泣きたくても泣けない時、洗髪という無防備になる一瞬の隙間に感情が溢れ出る。「泣き伏して」しまうほどの感情をその時まで堪えていたのでしょうか。泣けてよかったと思いました。(みちほ)
- 涙も嗚咽も髪を洗うシャワーの勢いで誰に憚ることもない。思わず悲しみの涙が噴き出てきたのだろう。でも「髪洗う」の季語から泣くだけ泣いた後はスッキリして毅然とした作者に戻ったことは想像に難くない。(うつぎ)

- 髪を洗っている時顔に流れるお湯が涙を誘ったのですね。泣き伏しての措辞に死に直面した深刻な悲しみを想像しました。女性ならではの佳句だと心を打たれました。(よし女)
- 悲しいこと辛いことが洗髪の際に蘇ったのでしょうか。でもその涙はお湯やシャンプーで洗い流され人目につかないことです。(P)
- 女性なら一度はこういう経験をしたことがあるのではないのでしょうか。泣き伏してしまひけりと自分でも驚くほどの感情の高ぶりを上手く表しておられ胸にひびきます。(ひかり)

26 意地でのむビールの彼を知りにけり

26.1 波出石品女

いつになく悪酔いしてまるで人が変わったかのように愚痴りながらビールをあおっている彼がいる。きっと人には言えない出来事があったのだろう。仕事の人間関係がそれとも女性に裏切られたのかもしれない。でもこんなに動揺した彼の姿をみるのは始めて全く意外だ。なんでもない句だと思うかもしれないが、彼と…ではなく、彼を…であることに注目して欲しい。「意地でのむビールの彼と知りにつけり」の場合は、そういう癖があることをあらかじめ知っていて今日もまたそうなんだという説明句になる。彼を…によって、初めて遭遇したという驚きになるのである。一文字の違いの重みをこの作品から学びたい。(みのる)

- 仕事仲間の彼が飲むすがたに只ならぬものを感じて驚いている。きっと仕事の上で悔しい思いをされたのでしょうか。普段は人当たりのいい人なのに声をかけるのも憚られそうで、悪酔いしなければいいかと心配されているのが伝わります。(ひかり)
- 「意地で飲む」ってどういう場面なのでしょう。飲みたくないのに気持ちを忘れて飲んでいるのでしょうか。「意地でのむビールの彼」という表現が面白いと思います。「彼を」と「彼と」の違い。一文字の大切さがわかります。(みちほ)
- 彼は普段はお酒をのまない人なのだろう。今日は意地になってビールをのんでいる。こんな彼を見るのは初めてだ。ここまでしか語られていない。一体何があったのだろう、作者とはどういう関係なのだろう、と読者は映画の一シーンに誘われるような句である。(うつぎ)

27 梅雨菌大団結をもくろめり

27.1 阿波野青畝

林中のあらぬへに梅雨菌の集団が出現しているのを発見した。大中小と様々であるが小さいのもみるうちに成長するに違いない。増殖するような梅雨菌の勢いを見て「大団結をもくろめり」と擬人的に詠んだあたりがことばの魔術師と言われる所以であろう。「梅雨菌仲よう傘をならべけり」「梅雨菌雨落ちざるに笠をさす」などの作品とともに卒寿翁にして幼子のような感性におどろかされる。(みのる)

- 梅雨菌は水分を含み大小固まって生えている姿は可愛いものであるが人に踏まれたり蹴飛ばされたりするのが常で手に取ることはあまりない。そんな小さなものなのに「大団結をもくろむ」と擬人化した比喻で大きく出たところが滑稽でとても楽しい。
- 初見では梅雨菌をそのままカビのようなものをイメージしてしまいました。ツユキノコと読むことを知り、カビとキノコでは大違いと笑ってしまいました。「大団結をもくろめり」という表現で梅雨の鬱陶しさがユーモラスな感覚に変わります。

28 一隅を照らす願ひの安居かな

28.1 阿波野青畝

四方に篝火を焚いて能を演じる薪能は5月頃に奈良の興福寺南大門前や春日大社社殿前で行われるものが有名であるが、元来修二会行事から派生したとされるところから春の季語となっている。篝火が躍るたびに演じている人の影法師もわななくように揺れるのである。「こぞる」の措辞が非凡であるが大勢の人がからむ演目であることが想像できる。(みのる)

- 一隅を照らすを調べて最澄の言葉の中にあるというのを知り安居の修行の大事さが伝わります。修行に立ち会えたことに または参加されたことへの充実感が感じられます。(ひかり)
- 安居という言葉始めて知りました。「一隅を照らす」そうなりたいものです。その願いを持って日々暮らします。(みちほ)

29 影法師わななきこぞる薪能

29.1 阿波野青畝

四方に篝火を焚いて能を演じる薪能は5月頃に奈良の興福寺南大門前や春日大社社殿前で行われるものが有名であるが、元来修二会行事から派生したとされるところから春の季語となっている。篝火が躍るたびに演じている人の影法師もわななくように揺れるのである。「こぞる」の措辞が非凡であるが大勢の人がからむ演目であることが想像できる。(みのる)

- 実像ではなく影法師を詠んだことで読者は情景の想像をより膨らませる。影がわななく様に揺らめいている演者はあの世の亡霊、「こぞる」は一斉の地謡が入った場面にも思いました。
- 夜闇の中がかがり火の中での能。涼しい風が吹き炎がゆれ、日常とは切り離された世界が想像されます。周りに大勢の観客がいてもすっかり幽玄の世界に引き込まれてしまう舞台のようです。

30 梅雨の人パチンコ盤の裏に居る

30.1 阿波野青畝

懐かしい昭和の風景ですね。現代のパチンコ盤は全て自動化されていますが昭和のそれは盤の裏に人が居てパチンコ玉の補充をしたり、トラブルが生じたときの対応などをしていました。雨の日や梅雨の時期には湿気で玉の動きがスムーズでないためパチンコ盤も機嫌が悪く裏で対応する人も汗だくだったでしょうね。梅雨の季感が動くのでは？という詮索はして欲しくない。狭苦しい場所で走り回る人は梅雨の時期が一番辛いのではと同情の気持ちもある。(みのる)

- 梅雨の鬱陶しさの気晴らしにパチンコに出かけたのでしょうか。作者はパチンコ盤の向うがわ人の気配を感じ、狭い場所で汗だくになって働く人に気づきました。自分の悦を支えるために人が働いていることに感謝しているように思えます。
- 音と湿りの狭い空間が持ち場とあればかなり過酷です。客が遊んでいるのに裏側は必死、時々頭が見えることもあったようです。じめじめした時期は特に大変だと思っ遣っている作者が見えます。

31 鈴虫の数は減れども昂ぶりぬ

31.1 波出石品女

どんな昆虫でもそうですが繁殖期には凶暴になり、鈴虫の場合、餌が足りていても共食いします。飼育密度とって一つの鑑賞容器にどのくらいの数の固体を入れるとよいのかというルーツもあるようです。さて揚句も観賞用の鈴虫です。毎日涼しい楽を愉しませてくれているのだがちょっと数が減ってきたようだ。強いものだけが生き残るという自然界の宿命に克って今夜も健気に雌を求めて啼いているのである。(みのる)

- 4年来鈴虫が孵化し今年も貰い手もなく二つのケースに超過密状態で大きくなりつつある。一斉に鳴き始めると家を揺るがす程であるが数も減ると当然雌も減っているわけで一途な声は哀れを誘う。「昂ぶりぬ」が巧いですね。(うつぎ)
- 大昔子供と鈴虫を飼ったことを思い出します。最後はメスがオスを食べ栄養源にして産卵するのだとか。目の当たりにしたときはショックでしたが、骨まで愛されたオスはいいなと思えましたよ。揚句の鈴虫も最後の力を絞っているのでしょうか。(よし女)
- 子供が小さい時に二三年飼った事があります、多い時は喧しい程で益過ぎになると次第に減っています。数がへっても大きな声で鳴いていたやうです。昂ぶりぬがきいていますね。(あさこ) a- 以前松尾山麓の年中鳴かせる鈴虫寺(華厳寺)に行ったこと思い出しました。鈴虫の音色を聴きながら住職の説法を聞きました。このお寺は年中部屋の温度を適度に保って飼っているようです。鈴虫は少ない数の方がソプラノの透き通った音色に合ってますね。もうすぐ聴けますね。(満天)

32 白涼し黒なほ涼し夏衣

32.1 波出石品女

ふつう黒は暑苦しい感じがするのであるが涼しそうなの白の屯の中の黒一点がより涼しく感じたということだと思う。では具体的にそのシーンを連想してみたい。直感的に涼しいと感じる黒は羅と考えるのが順当であろう。では、白衣と黒衣とが共存するシチュエーションはというと弔事ではなさそうである。慶事であれば女性はともかく男性ならダークスーツを着用することはある。しかし羅ということになれば慶事に招かれた高僧ではないだろうかと考えた。古刹での青畝師の句碑開き式典の様子かも知れない。(みのる)

- 夏服ではなく夏衣であるから黒の和服を想像しました。絹か紗の襟の白、下着の透けている白が黒のメリハリとなり如何にも涼しげである。白っぽい服の中の黒ととるべきだろうが単に黒の和服姿として鑑賞しました。(うつぎ)
- この句の鑑賞は難しいです。一人歩きをしようにも体験に乏しく、慶事の白い洋服の中の黒レースのドレスをまとった女性迄で連想はストップします。古刹での青畝師の句碑開き式典の様子との解説で一気に景色が広がりました。(よし女)

33 蛇つかみたる汝の手を嫌ひけり

33.1 波出石品女

平気で蛇を素手で掴む腕白漢が居る。調子に乗ると手にした蛇をこれみよがしに振り回して周囲の女性が怖がるのを喜ぶ。手を嫌ひけり…は、手だけではなくて、そうした悪趣味な人格をも嫌悪しているの

である。旧約聖書創世記には、エバが蛇にそそのかされてアダムを騙し、神の約束を破るくだりがある。エバが蛇のせいにして言い訳をしたために神の怒りに触れ、罰として、女の裔末はみな産みの苦しみに耐えなければならないと言われたのである。蛇と女性とが敵対関係になったのは、そこに原点がある… というのはぼくの勝手な推測です。(みのる)

- 蛇捕りの二人連れに出くわしたことがあった。蝮などを商うつもりであろうが、蛇そのものを見るより気持悪かったことを思い出した。この句は全く同感である。(うつぎ)
- 蛇は苦手ですねえ。にょろりがちょろりみえても飛び上がります。その蛇を素手で掴むとは… そのような場面でも凝視して句になるのですね。(よし女)
- 小学校に入ったばかりのころ、男の子からこの生き物を投げつけられた恐怖を未だにひきずっています。今ならこの品女さんの句をあのいじめっ子に叫んでやるのに！（さつき）

34 暑に耐ふる力を得たり虚子百句

34.1 波出石品女

「虚子百句」は、虚子の孫である稲畑汀子（ホトトギス主宰）が描いた虚子句の鑑賞書で、高濱虚子の作句精神を知る教養書として、また実作の手引きとして愛読されている。「俳句研究」に連載された記事であるが、単行本化されたものが古書として流通している。夏の暑い時期には句を詠もうという意欲も沈滞するものであるが、愛読書である虚子百句を読み返すことでまた頑張ろうという意欲を得たのである。夏に限らず句作が不調におちいることは誰にでもあるが、たいていは詩情が狂ってしまっていることが多い。そんなときは、愛読書や選集などを読み返すことで軌道修正することが出来る。(みのる)

- 虚子百句は未だ縁なく手にしたことがありません。近近図書館に行って探してみることにしましょう。(よし女)
- 虚子百句はたまたま手本に有りました。もう一度読み直してわたしも頑張ってみます。(あさこ)

35 病人の地獄と嘆く西日かな

35.1 波出石品女

病人でなくとも強い西日をまともに浴びることは耐えがたいが、揚句の場合、西日避けるために場所を変えたり移動したりできない入院病棟の窓際のベッドはないだろうか。勿論カーテンとかブラインドなども備えられているのだけれど、西日の威力はそれらの防護手段をもってしてもなお耐えられないほど強力なのである。今日ほど質のよい空調設備もなかった時代の病棟を連想すると、暑さと西日のダブルパンチはまさに地獄なのであろう。患者の洩らしたひとことが一句になったのであるが作者にも共感する気持ちがあるのである。(みのる)

- 暑さと西日に病人は猶ぐったりする。気遣う作者にとっても耐え難い。何度か同じような体験をした。病人にとって西日の地獄は決して大袈裟な表現ではない。身につまされる句である。(うつぎ)
- 身体を自由に動かせない病人にとって西日の当る病室は まさに地獄の暑さです。カーテンをひくけど病院のカーテンは薄いですから顔にでも西日が当たるとたまりませんね。私にもこんな経験をしたこと思い出しました。(よし子)
- この一句本当に身にしみます。今年のちょうど今日主人が無理矢理退院したことを思い出しました。今年も暑く暑く、取りあえず夏が終るまで何とか頑張ってみようと思えばいい気温です。病気と西日のダブルパンチこそ病人にとっては地獄と言えるでしょうね。(よし女)

36 桃はむき易しとナイフ使はずに

36.1 波出石品女

食べごろに熟した桃は確かに揚句の通り。でもナイフを使わずに指先だけで綺麗にむくにはちょっとこつが要るのである。短気で不器用な人は一気にむこうとして途中で千切れてしまう。落ち着いてゆっくりと均一な力加減でむくのが秘訣、糊付けされた封筒を破らずにゆっくりと開けるあの要領である。器用さに自信のない作者はあまりにみごとに綺麗にむき上がった桃を見て驚いている。自慢ではないがぼくはこういうの得意である。(みのる)

- 「早く食べたい」という顔をした子どもたちのまえで、母親である作者がナイフを使わずに桃を剥いている場面を想像しました。一枚一枚剥かれていく桃を見つめている子どもたちの表情も浮かびます。(さつき)
- よく熟れた桃は指でむき易く、それがつるんと剥けるととても嬉しくなります。固い所に引っかかって皮が破れると仕方なくナイフの出番ですね。(よし女)
- ももの美味しさには触れていないのですが、つるんと皮が剥けて口に入れると冷たく甘い桃が目の前に浮かんでくるような句です。(よし子)
- 爪あとをつけずすると剥けた桃は一段と美味しそうに見えます。(ひかり)

37 塗香してあるまに汗のひきにけり

37.1 波出石品女

塗香(ずこう)とは仏様の御前に上がる際、自らの心と身体を清めるために使われるものです。「<http://shop308.co.jp/hpgen/HPB/entries/5.html>」具体的な使い方(作法)のページをリンクしておきます。大きなお寺ではお堂に上がるときに塗香が準備されていることもある。心を無にして教えられるままに神妙に塗香していると、自然と心が落ち着くのを覚えて、ふと我に返ると汗ばんでいたのがすっかり治まっているのに気付いた。季語は汗だが、安居寺の雰囲気もある。(みのる)

- 塗香と言う熟語を初めて知りました。具体的なページもリンクしていただき有難うございます。香木から作るとか、優しい香りがするでしょう。作法どうりにしていたら汗が引いていた、暑さを忘れていた。一心不乱だったんですね。(よし女)
- 以前京都のお寺で写経道場のお部屋を垣間見たことがあります。整然と机が並べられ入口には塗香の用意がしてありました。先ず塗香をして心を清め息を整えて席に着くようでした。「汗のひきにけり」にその時のすがすがしい気持を思い出しました。(菜々)
- 仏様に参る前に塗香の作法があるのを知りませんでした。心を無にしているだけでわずかの時間に自然と汗もひくというのです。とてもいいことですね。(ひかり)

38 噴水の大円柱となりにけり

38.1 波出石品女

園の要に設置された大噴水である。噴水はコンピュータで制御演出されて、演舞のさまに序破急と変化して水を噴き上げる。最初は周辺の小さい噴水が侍者の如くに低く水を噴き上げ、やがて中央部の主役が噴き上がり始める。そしていよいよ最後のクライマックスには大円柱となって空高く立ち上がるのである。

揚句はその瞬間をとらえて写生したのであるが、それによって急となるまでの序破の様子やクライマックスのあと、ピタッと休止して静寂に戻ったあとの余韻などにも連想が働く。やもすると序破急の全てを詠もうとしがちであるが、瞬間写生することで前後は連想に委ねるのがうまい詠み方である。(みのる)

- 噴水の序破急の演舞、クライマックスの大円柱と、句も然る事ながら解説が素敵ですね。先の高校生たちが占領していた大噴水でしょうか。一度見たいものです。(よし女)

39 高校生大噴水を占領す

39.1 波出石品女

分かりやすい句ですね。いつもなら空いているのだけれど、昼間のいつとき修学旅行中の高校生達が集団で大噴水を取り囲んでいて近づけないのである。集合合図がかかるまでの時間調整かも知れない。となれば広島市の平和公園あたりの写生ではないかと想像する。有名な公園にはどこにも噴水はあるのでとくに場所を限定する必要はない。(みのる)

- 大噴水を占領するほど大多数の高校生が連想できます。(よし女 f)
- 大噴水の白、制服の白、眩しいばかりである。両方の漲る力に触発されての句である。(うつぎ)
- 真っ直ぐ垂直に上がる噴水の力、高校生たちの真っ直ぐな若い力、なるほど捉えどころがすばらしいと感心しました。(よし子)
- これは間違いなく修学旅行ですね、涼を求めて噴水に集まっているさまがよくわかります。(あさこ)
- 若さあふれる男子高校生が噴水の前で戯れている大噴水の音もかき消す勢い。猛暑も吹っ飛ばす楽しい句ですね。(満天)

40 風鈴のよく鳴る芦屋住まひかな

40.1 波出石品女

谷崎潤一郎の小説「細雪」の舞台として知られる芦屋は、山の手には豪邸の建ち並ぶ高級住宅街があることでも有名である。この界隈の上流社会に生活する家庭の主婦を芦屋夫人とも呼ぶ。作者が芦屋住まいなのではなく、何らかの関わりがあって素敵な豪邸に招かれたのだと思う。高台のこの住宅は、海から山へ吹き抜ける風がよく通うので夏でも涼しく、風鈴の奏でる心地よい調べに心を遊ばせながら、こんなところに住めたらいいけれど自分には到底叶わないことだと羨望しているのである。(みのる)

- かなり前になりますが芦屋界隈を歩いてみたく、旅行を計画したことがあります。実現しませんでした。海から山へ吹きぬける風に風鈴がよく鳴っていて「いいお住まいですね」の音が聞こえるようです。(よし女)
- 風鈴と芦屋の措辞が響きあい高台にある緑に囲まれた大邸宅の落ち着いた佇まいを想像さす。下町の喧噪の中とこ芦屋とでは風鈴の音さえ違って聞こえる。良い暮しだなあ、羨ましい。「住まいかな」に作者の気持が感じられる(うつぎ)
- 山からそして海から通う豊かな風の恵みを表現するのに、「芦屋住まひ」がとてもうまく使われています。緑に囲まれたお屋敷の縁側に吊るされた風鈴は客間に涼しげな音を届けていることでしょう。(ひかり)

- 以前、ゴスペルの吟行で芦屋の豪邸を横目にしながら歩いたこと思い出しました。狭いところでは風鈴の音も人によって迷惑に聞こえる場合もあると思いますが大邸宅であれば近所に聞こえる事もなし固有名詞の芦屋がぴったりですね。(満天)
- 風鈴は我が家にも吊るしてをりますが何時もは全然鳴りません。風が有るとき涼しい音が聞こえます、寂があっていいものですね。(あさこ)

41 暑に負けてならぬ献立つくりけり

41.1 波出石品女

夏負けに陥ると食欲も減退し、一気に体力が衰弱する。高齢者の場合は特に深刻でひどくなると何も受け付けなくなるので、ついには点滴注射で栄養を補うようなことにもなる。その為にこの季節の家庭の主婦は、栄養価が高くかつ食が進むようにと日々いろいろと考えて献立に工夫を凝らせるのである。「暑に負けてならぬ」の措辞には、暑さに負けてはいられないという作者自身の決意も窺える。(みのる)

- ご本人か家族の中に疲れ気味の方がおられるのでしょうか。鶏胸肉のイミダペプチド(疲労除去成分)が最近よくいわれますね。暑さに負けない、スタミナレシピは肉、野菜を上手に取りまじらせよう。夏の料理は手早くしないと自分が疲れます。私が今年1番にしたのが夏の七色ピクルス作り、自家産のもの殆どがその材料になります。ゴーヤ、南瓜のうらなり、青トマト、にんじん、セロリなど何でも使います。食欲増進剤にはスパイスをふんだんに使います。食事はとても大切です。(よし女)
- どうしても夏場は食欲が減退気味!しかし家族や自分の健康のためできる所は手抜きしながらも頑張る。暑に負けてならぬの措辞が強い意志を表しています。(ぼんこ)

42 裁屑を持ち去ってある風涼し

42.1 波出石品女

風が書物のページを繰ったり、秋草を靡かせたり、落葉や紅葉を散らしたり、髪の毛を乱したりと等々、風(原因)とその結果を詠んだ句は多く、得てして類想になりやすいが、裁屑というのは珍しい。型紙にあわせて印をつけたあと、ざくざくと裁っている。大まかな裁ち作業が終わるまでは、裁屑は机辺に散らかったままなので窓から通ってくる涼風に持ち上げられたり翻ったりするのである。裁っているのは、薄地で涼しげな色のワンピースの生地ではないだろうか。なんとなくうきうきした気分があり鼻歌も聞こえてきそう。初夏の雰囲気を感じる作品である。(みのる)

- 大まかな裁断を終えるまでの風は布や型紙がずれて困るので、裁断を終えてから優しい風を入れたのでしょ。その一段落の安堵感や次の作業の手順、出来上がりへの期待感などが「風涼し」の措辞に感じられます。(よし女)
- 裁断する時に結構大小の裁屑が出る。開け放つ窓から涼しい風が抜けると部屋の隅に吹かれた屑が寄せられます。裁屑のかたづけはまたあとでと気にとめず集中して裁縫の成果を愉しんでいる。充実した時間なのでしょう。(ひかり)
- お気に入りの柄で完成をイメージしながら布を裁っている。心はルンルンだ。裁屑をあおる風も心地いい。日常の中の幸せが感じられる。(うつぎ)
- 少し大きめの裁屑は羽のように、細かい裁屑はくるくるとねじれてリボンのように風に吹かれ吹かれていつの間にか何処かに失せてしまった。作者はそれを楽しんでいるよう。「吹き飛ばす」でなく「持ち去っている」に風の涼しさと柔らかい花柄の生地を想像しました。(菜々)

43 彼の意にしたがひがたき端居かな

43.1 波出石品女

端居というからにはある程度近い間柄であると思うけれど、仕事関係の手順の打合せのような気もする。上司である彼は相手の意見を求めるでもなく一方的に指示するばかり。命令とあらば従うほかはないが、年長者である作者の意見やアドバイスを聞こうともしない傲慢さにちょっとうんざり。やむなく表向きは従う姿勢を繕っているのであるが心の中では決して納得していないのである。先入観で鑑賞するのはよくないが、若いドクターとベテランナースとが病院裏のベンチで担当する患者への対処法について相談している姿を連想してしまった。(みのる)

- 句が勝手に一人歩きをしました。若いカップルを想像します。結婚式に関するのもろもろの行事の中で「それだけは従えないわ」と甘えている彼女。女性リードのよき家庭ができるでしょうか？(よし女)
- 作者はきっと一人になりたかったのだろう。それを横からうるさく話しかけれ、「黙って過ごせないものか」と内心うんざりしていたのでしょうか。(さつき)
- 端居だから最初は話が合っていたのかもしれない。途中から彼の考えに承服しかねることが出てきたのだと想像する。でもその場では反論せず、納得のいかない気持ちを句に昇華させたことはさすがです。(うつぎ)
- 暑くて忙しかった一日がやっと終わり端居してほっとしている時なのに彼からいろいろ指図されてうんざりしているのでしょうか。でもノーとは言えない。したがいがたきは心の中なのでしょうね。彼とはどういゆう関係のひとなのでしょうか、気になります。(よし子)
- 納得していないのに反論しないで黙って聞いているのは恋人関係だからかなと思いました。喧嘩にならないように我慢している。こんな涼しい気持ちのいい場所でくつろいでいるのになぜ考えががみ合わないのか。端居かなに強い意志を感じます。(ひかり)

44 抓むとは指三本や草を引く

44.1 波出石品女

この句がなぜ四季選集に選ばれたのかと思うくらいシンプルな作品ですね。ふつう何か小さいものを抓むときは親指と人差し指の二本ですが、確かに草引きの時は中指も添えて三本になります。二本指で強引に引くと根が残って千切れることがあるので、三本指をぐっと土に押し込むようにして根の部分をつまみま。そして一気に引き抜くのではなく、千切れないようにゆっくりじわーっと引くのです。草引きを日課にしている人には確かにその感じが共感できる句ですね。(みのる)

- 草を引くのに3本の指を使っているなど考えもしませんでした。手鉤を持ってきてがしがし削ってしまいます。時に手で引いても気ばかり走って指の本数までは…感性を磨くとはこう言うことなのでしょうね。(よし女)

45 向日葵に汝等と見下ろされけり

45.1 波出石品女

最近の園芸種ひまわりは品種改良されて随分小型のものが出回っているが、向日葵本来の野趣は揚句のような雰囲気のものだと思う。見下ろされると言うことは、見上げるくらいに大きいと言うことになる。

「汝等と」の措辞が面白いのであってそれに続くキーワードがいろいろと想像されるが、概して戒めの言葉が多い。聖書にも神の預言として「汝ら…」の言葉は数多く、「汝らは地の塩なり」「汝ら幸福なり喜び喜べ」に代表される山上の垂訓は有名である。うち仰いで観察していると何かを諭すかのよう向日葵の方から語り掛けてきた、対象物と作者の心とが通い合った一瞬の写生である。(みのる)

- 句またがりの変調は何回も読まないリズムに乗れません。で、繰り返し声を出して読んでみました。ラリルレロのラ行音がリズムを助けているように思いました。(よし女)
- 向日葵に出会って汝等の措辞にやはり聖書のことばを連想されたのではないのでしょうか。先日いつも通る菜園に今年は初めて屋根まで届く大きな向日葵と出会いびっくりして自転車を止めて暫く眺めていました。自然物である向日葵に対して遜った気持ちで句を詠む姿勢を見習いたいです。(満天)

46 反対に歩む廊下や昼寝覚

46.1 波出石品女

昼寝から覚めた直後は、しばらく意識が希薄になりとんちんかんな言動をとることがある。幼子や高齢者になるほどその傾向があるように思うが、主婦業である家人の場合も、特に疲れが溜まっていてしっかりと深い眠りに落ちたあとなどには、夕方まで眠ってしまい覚めたときに朝だと勘違いして大慌てするときがある。揚句の場合は、方向音痴になってしまったという。夢の続きで錯覚が生じたのであろう。(みのる)

- このような経験は誰もが持っていて大いに頷ける一句です。それが俳句になるすごさを学びました。(よし女)
- 上五、中七、反対に廊下を歩むとは一体何のことだろうと思わせ、下五の昼寝覚で読者は納得。私の寝覚めもこんな風にと考え合わず楽しさがあります。(うつぎ)
- これはうまい句ですね。一読して景が浮かんできます。そしてくすつと笑ってしまいました。こういうこと自分にもあるあるなあと..(よし子)
- 最近同じようなことを経験しました。昼寝はぐっすりねてはだめですね。寝ぼけてここはどこだったかとしばらく居場所が分からなくなります。反対に歩む廊下..と表現されたのが面白く、具体的に表現することの大切さを学びました。(ひかり)

47 炎天にのみさらされて救護班

47.1 波出石品女

交通事故でもおきたのであろうか、救護の人たちが炎天下を右往左往しつつ懸命に処置にあたっている。それが仕事だとはいえあまりにも過酷で走り寄って日傘でも差し掛けてあげたいと同情しているのである。句意は明快であるのだが、炎天にのみ..の「のみ」の解釈に悩んだ。揚句の背景は事故現場で複数の被害者に対応している数名の救護班のようすと思える。怪我をしたひとは応急処置を受けたのち街路樹などの片陰に寝かせられて救急車の到着を待っているのだが、救護班にはそのような小休する余裕もなく慌ただしく炎天を行き来しているのである。(みのる)

- これは難しい句だと思いました。一読大きな交通事故が浮かびましたがテレビ画面で見たことしか想像できません。暑い暑い日の大通りの事故だったのでしょうか。救護班の大変さを思うばかりです。(よし女)

- 何時も思うのですが夏に完全武装で猛暑の中救護に当たっておられる姿は仕事とはいえ頭が下がります。健康管理をどのようにされているのかなと思います。中七に作者の救護者への同情心を感じました。(満天)

48 熱いもの食べても梅雨の寒さかな

48.1 波出石品女

梅雨時に、北方の高気圧から冷たい風が吹き込んできて気温が下がることある。六月とは思えない寒さで火が欲しくなったりする。特に東北地方のそれはしばしば農作物の作柄を悪くし、いわゆる冷夏、冷害ともいわれる。「梅雨寒」というのは比較的新しい季語であるが、巧みにアレンジされている。身体の芯から冷える感じがするので熱々の料理を用意して食べたのであるが、それでもなお底冷えするような寒さなのである。うっかりすると「梅雨の寒さかな」としがちであるが、「梅雨の寒さかな」と詠んだところがうまい。前者は理屈っぽく聞こえるからである。(みのる)

- 毎年梅雨の間に必ず一日はセーターを着たいような寒い日がある。飾らない言葉で感じたままを句にされ好感が持てる。子規の母親の言葉そのままの「毎年よ彼岸の入りに寒いのは」を思い出しました。(うつぎ)
- 「梅雨寒」とは言い得て妙な季語だと毎年この季節になると思います。暑い日の翌日は冬に逆戻り。つい先日もそんな日でギョーザを熱々のスープでいただきました。冬物がいつまでもかたずかない日が続きます。(よし女)
- 何か気になる心配事でもあって食べ終わったら余計に寒さを感じられたのではないかしら…(満天)

49 大阪に行かねばならぬ暑さかな

49.1 波出石品女

都会のうだるような蒸し暑さを知っている作者は、緑豊かで夏も涼しい田舎に嫁いでその快適な暮らしにすっかり馴染んでしまった。懐かしい知己との再会や行事参加のために時々は大阪へ行く機会があるのであるが、とりわけこの暑い時期は体力的にも負担になるので出来れば避けたいのである。けれども今回はどうしても出かけなくてはならない用件があり、やむなくその暑さともたたかわなければならぬと覚悟したのである。(みのる)

- 行かねばならぬ用事って何だろう？ しかもこの暑いなかを…などといろいろと詮索をしてしまいますね。大阪は常夏の国よりも暑い日があります。(よし子)
- どうしても行かねばならないがこの暑さはこたえる。でもそんなことは言っておれない。「行かねばならぬ暑さかな」には覚悟の前のちょっと引いた気持ちも含まれている。(うつぎ)
- のっぴきならない事が出かねばならない。暑いなーと空をみあげる。この句「大阪」の固有名詞が効いていると思いました。(よし女)
- 「行かねばならぬ」でこの上ない暑さを感じます。真っ白なブラウスなど着て、よし、この暑さになぞ負けないぞと出かけられたかも。私も丹波から嫁いで来た頃はなんと大阪は暑いのだろうと思ったものです。(菜々)
- ひと昔前までは大阪が全国で最も暑い所でした。いかねばならぬという措辞に覚悟のほどが感じられます。(ぼんこ)

- 良き事であれば暑さなど気にならないはずですが中七に重大さを感じます。こんな時にも句が詠めるんですね。(満天)

50 全身が水鉄砲の的なりし

50.1 波出石品女

本物の鉄砲ならば敵の心臓を狙って打つのだが、キャッキヤと騒いで遊ぶ幼子の水鉄砲はどこに命中しても嬉しい。標的となっている作者もまた、嬉しそうに笑顔でそれを全身で受け止めては子供達を満足させているのである。日向水のプールで遊んでいるお孫さんたちと水鉄砲の標的となっている大人達(若い両親、あるいはおじいちゃんおばあちゃん)という微笑ましいシーンが見えてくる。(みのる)

- 楽しい一句ですね。「全身が水鉄砲の的なり」に続く「し」の強調によって、作者が上から下までぐっしょり濡れている情景が浮かびます。(よし女)
- お孫さんたちから全身がずぶ濡れになるほど水鉄砲の攻撃を受けているおばあちゃん。打つ方も打たれる方も楽しそう。暑さを忘れる夏の一日です。(よし子)
- 孫とお風呂で遊ばばどこを狙い撃ちされても楽しい幸せな瞬間です。(ぼんこ)
- とても楽しそうですね。そういえば昔こういうことがあったことを思い出しました。全身が水鉄砲の的、まさにその通りです。(ひかり)

51 うなじ打ちたる滴りの恐怖かな

51.1 波出石品女

秋芳洞のような洞窟か廃坑跡での吟行かと思う。洞窟の中はとても涼しいのだけれどどこも薄気味悪い雰囲気があるので背後から滴りの不意打ちを食らって思わず悲鳴が出た。再びの被害を避けるべく恐る恐る注意深く進んでいく様子も連想できる。恐怖かなの措辞が的確で且つ滑稽味もある。出そうで出ないことばだと思う。(みのる)

- 山道にあるような小さなトンネルが浮かびました。薄暗く何が潜んでいるか怖くてたまらないけれど、そこを通らなければ目的地には行けない。滴りの不意打ちに鳥肌が立った様子が「恐怖」という言葉に込められていると感じました。(さつき)
- うなじ打つと言えば雪解凍を思いだします。溶け始めた氷柱の下をサッと潜るのですがタイミング悪くマフラーの隙間から入ってくるんです。トラウマ?とまではいかないまでも滴りでこんなこと思い出すのはやはりかなりの恐怖感を感じているということなんですね。(こすもす)
- 洞窟か廃坑跡を不気味な霊気を感じながら怖々進んでいたのだろう。いきなり冷たい物がうなじを強く打った。滴りであるが何の仕業? 恐怖の措辞が作者の心情や情景を余すことなく語っている。瞬間写生のお手本にしたいと思います。(うつぎ)
- うす気味悪い洞窟は廃坑跡なのでしょう。恐怖の措辞が一句の中で占める割合は大きな価値がありますね。このような言葉が使えることに驚きを感じます。(よし女)
- 打ちたるの措辞でかなり大きなしずくだったことがわかります。体を屈めうす暗い洞窟は涼しいどころか滴りの音も大きく異様な雰囲気であったでしょうが… 恐怖とは少しオーバーな感じもします。(満天)

- 私も洞窟の中の滴りと思います。突然にうなじから背中の方にまで入ってきたのでしょうか。その瞬間は毒虫か何かが入ったと思いキャーツと叫んだことでしょうか。誰だってそうなれば恐怖です。それが滴りとわかり大笑い。面白い場面ですね。(よし子)

52 立暗みすくなほりまた草を引く

52.1 波出石品女

草引きに集中していて思わず長時間ががんでいたことに気づき、ちょっと腰を伸ばそうと立ち上がった瞬間に目が回ってふらついたのである。あれっ？ と、一瞬不安が過ぎたが、しばらくじっとしているとやがて治まったので、やれやれもう大丈夫と安心してまた草引きの続きを始めたのである。だれもが体験していることであるが一句に詠まれると、してやられたという感がある。炎天下ではないと思うが夏のこの時期の草取りは夢中になると危険、侮ってはいけない。(みのる)

- 今日中にここまでは草を引いておこうという作者の強い意志を感じます。私も立暗みを起こしますが、加齢現象の一つでもあるようです。ご無理をされませんようにお気を付けくださいと申し上げます。(よし女)
- 作者は看護士さん、時々おこる立暗みにも慣れこの程度なら大丈夫と判断されたのだろう。夏の草引きは引いても引いても勢いよくてきりがなく、もう少しもう少しといつ頑張ってしまう。ちょっとした出来事も逃さず句にされる作者にいつも感心させられます。(うつぎ)
- 今日こそと思いながら一日延ばしにしてしまう草引き。先日 30 分しただけでずいぶんスッキリしました。そのくらいでは勿論立ち眩みはしませんでした。ずっとしたを向いて随分真面目に草取りされたのでしょうか。(こすもす)
- 以前度々眩暈の経験のある私には作者が又すぐ草を引かれてるのにはびっくり自分に気合を入れ作業を続ける。性格がよく出ていますね。(満天)

53 とぐる巻く笹の十六ささげかな

53.1 波出石品女

十六ささげは、つる性の種類で地域によっては「長ささげ」「三尺ささげ」「ふるう豆」とも呼ばれる。主に若い莢を食用にするそうだ。一把ではなくおそらく数把が笹の上に盛ってあるすがたが、あたかもとぐるを巻いているかのように見えた。ゆであげた蕎麦や素麺が笹に盛られてあるのも同じような姿になるが、ささげの色が緑なのとその太さとでよりリアルに思えたのである。(みのる)

- 句意がよくわかり面白いですね。十六ささげは岐阜県のブランド食材とか。こちらではお目にかかった記憶がありません。栄養学的に女性におすすめの野菜とか。来年元気だったら種を蒔いて育ててみましょう。(よし女)
- 今はトレイにラップですが一昔前の八百屋さんに並んでいるささげを想像しました。何回も読んでみると調べがいいですね。新鮮で美味しそうです。(うつぎ)
- 「とぐる巻く」楽しい表現ですね。長いから笹に盛るとこんなふうになってしまいます。茹でてお箸で取り出すとき、今度は長〜く垂れます。で、なんとなく敬遠していますがとても美味しいそうですね。一度買ってみようかな。(菜々)
- 笹一杯にとぐる巻いたように盛ってあるささげは 豊作だったのでしょうか。裏の畑から採ってきたばかりの新鮮な野菜は夏の料理の逸品です。(よし子)

54 送りあふ団扇の風や僧と俗

54.1 波出石品女

句意は明白、仏道へ献身した僧と俗にいきる作者とが向き合って話している。団扇の風を送ってふざけているのではなく、話す方聞く方お互いに相手のことを思いやる優しい心が無意識のうちにそのような所作になっていることに気づいたのである。「僧と俗」という表現はやもすれば月並みになりやすいが、揚句の場合は、上五中七に焦点があるため気にならないのかも知れない。ゆったりと時間が流れている雰囲気があるのでいそがしくおちつかない盆僧ではなく、お寺か或いは自宅での供養の法事ではないかと思う。(みのる)

- 僧が団扇の風を送るとはよほど親しい方が、お寺のお役を持っておられるのかもしれませんが。送りあふ団扇の風までは俗世間でよく見かける景が想像できますが、僧と俗の下五の意外性で句の景色が変わりますね。(よし女)
- 上五の送りあふでかなり長いおつきあいの月命日での会話。一か月分のお話をお坊さんに聞いていただきアドバイスを受ける。和やかなひとときそうですね。(満天)

55 押へられゆがむ乳房や髪洗ふ

55.1 波出石品女

男性としては降参という内容であるが、何となく実感や姿が連想できるところが面白く不思議な句だ。打ち屈んで髪を洗うときに膝小僧に乳房が押へつけられるような姿勢を想像したが、洗面台であることも考えられる。ゆがむほどの豊胸でない女性には嫉妬心のわく作品かも知れない…など関係の無いことまで連想してしまうのは男の鑑賞。さて GH の女流のみなさんは如何ですか。(みのる)

- 一読洗面台での洗髪かなと思いました。お風呂ではリラックスして髪が洗えますが洗面台では湯を散らさないようにとか、頭を湯口に近づけるようにとかするので、その窮屈さがゆがむの措辞になったのだと思います。(よし女)
- 浮世絵美人「洗い髪」を思い出しました。胸の豊かな長い髪の美人の入浴シーンの一コマが切り取られたのでしょうか。(かず)
- 女の人が自分の髪を洗ってゐる姿。色っぽいといふより必然的になる姿勢なのですが、俳句に詠むと思わぬよい句になりますね。(よし子)

56 わたしの句出て来い出て来い書を曝す

56.1 波出石品女

思わず微笑んでしまう楽しい作品である。曝書裡に一冊の合同句集をみつけた。熱心に学んでいた若き作家時代のものかも知れない。ともに切磋琢磨した仲間の作品とともに懐かしい自分の作品も並んでいる。おそらく敬愛する故阿波野青畝先生選のかつらぎ四季選集ではないかと思う。品女さんは仕事や家庭の中でも随分と重荷を背負ってこられた。けれども明るく、前向きで子供のような純真な気持ちを持ちづけて頑張ってこられた。そうでなければ揚句のような作品は詠めないし授からない。俳句を詠むこと、俳句を通して得られたよき人間関係が私を支えてくれたと自らも述懐されている。私達も人生の伴侶と言えるような俳句ライフを目指したいものだ。(みのる)

- どんな句だったのだろう、とわくわくしながら句集を繰っている姿がリフレインによって伝わってきます。何の銜もない言葉で詠まれ心打たれます。(うつぎ)
- 本は重たいし曝すことは重労働ですが、歌うようなリフレインによって作業も一句も楽しいものになっていますね。(よし女)
- 品女さんのこういう明るい句は好きです。曝す書の中に句集や俳誌がたくさんあるのでしょうか。曝しつつ懐かしく見てしまう。自分の句も全部覚えておくことは無理なので、こんな句も詠んでいたという発見の楽しさが伝わってきます。(ひかり)
- 作者は多忙な日々でも書物の虫干しをきちっとされてる。そして出て来いのリフレインで鼻歌でも歌いながら楽しんで回想句を探しておられるのでしょうか。(満天)

57 禅僧を働き蜂にたとへたり

57.1 波出石品女

慌ただしく移動して働く修行僧の様子を働き蜂にたとえた。写生された揚句のキャンパスには働き蜂は存在しないので、季感の有無からいうと微妙な作品であるが青畝師はよしとされた。おそらく禅寺が最も多忙なのは安居のころであるので、この句のなかにその雰囲気があるからではないだろうか。作者名は失念したが、「車内吊り広告紅葉盛りかな」の句も雰囲気として句が感じられるゆえ入選句となった記憶がある。季感の有無について学ぶにはよい例句だと思ったのでとりあげた。(みのる)

- 禅宗の教えは解りませんが、旧暦でも新暦でもお盆時期のお寺さんはおいそがしいです。特に禅宗はそうなのでしょう。それを働き蜂にたとえられたので単純に春の句なのかなと思いました。(よし女)
- よく働いておられる禅僧を見ての驚きを句になさった。残念ながら私はそこまでの情景は見たことがありませんが、お寺の行事に参加されてのことと思います。(ひかり)
- 禅宗には只管という教えがある。禅僧の毎日の作務にいそしんでいる姿を見て働き蜂に重ね合せた。そのひたすら振りに心を打たれたのである。(うつぎ)

58 全身をゆさぶる曲や籐椅子に

58.1 波出石品女

籐いすに身体を預けてリラックスし好きな音楽を聴いている。音楽 CD の連続演奏かも知れない。そのうち最も好きな曲となって気分も高揚し思わず籐いすを揺すりながら右に左にと身体を動かしてリズムに乗っているのである。音楽好きな作者自身の写生である。(みのる)

- 籐椅子でのリラックスタイム。大好きな思い出の曲にハートがゆさぶられているのでしょうか。楽しそうですね。(よし女)
- ゆさぶる曲ってどんな曲かしらといろいろ想像させられます。至福の時ですね。(満天)
- 楽しそうですね 昔懐かしい音楽がながれてきて たぶん青春時代を思い出されたのでしょうか。籐椅子がゆれるほど曲にのってをられるなんて。(よし子)

59 透けて見えぬ縫代や単物

59.1 波出石品女

辞書には、単物（ひとえもの）とは裏をつけずに仕立てた和服類の総称とあるが、昨今は和服そのものが滅多に見られなくなり季語として用いられる機会も減った。理屈から言えば縫代も見えてしまうのは当然なのであるが、それだけに神経を使って丁寧に仕上げている。いかにも涼しげな美しい日本の伝統文化に感動したのである。句集には揚句と隣り合って、「わが胸に見ゆる袷紗や単物」の句が見られるので、ひょっとすると揚句も自画像なのかも知れない。（みのる）

- 一読どう鑑賞していいものかと迷いました。たぶん品女さんはお裁縫がお好きなのだと思います。よし女さんが書いておられるように単物は縫い代の始末が大変なようです。単物の制作過程で綺麗に見えるように苦心された思いを詠まれたと感じました。（ひかり）
- 単衣ものもよく縫わされました。上物は表から透けても醜くないように縫代をテープで包むのですが、緩んだり突っ張ったりしないようにコツがいて苦労します。それが綺麗に処理されていると表から見てもいかにも涼しげです。掲句は自画像でしょう。単物の正装をピシッと決めた喜びが伺えます。（よし女）
- これは自分がきている着物ではなく、他の人がきている単物を見られた時の感想ではないかと思えます。縫代がきちんと始末されてあるお着物は涼しげで品よく見えたのでしょう、薄物の仕立ては表以上に裏側に手間がかかりますもの。（よし子）

60 貧しさを隠さぬ僧の夏炉かな

60.1 波出石品女

高原や北国では夏でも温度の低いときは炉に火を入れる。山家の一年中絶やさない炉火もまた夏炉であり、山荘の雨の夜に火を入れたストーブも夏炉である。揚句の僧は人里離れた深山のうらぶれた寺院を守りながら清貧に暮らしている。訪れた客人に対しても謙虚でその信心深さが為人から滲み出ている。惜しげもなく贅沢に薪を焚く夏炉ではなく、手あぶりに足るほどの質素な夏炉なのである。（みのる）

- 下五の夏炉かなには、貧しいながらも有るがままを受け入れこれで充分心は豊かである、と思わず季語の力がはたらいっている。清貧に暮らしている僧に親しみを感じている作者が見えます。（うつぎ to）
- 一句全体からは山寺の僧のつましい暮らしが連想出来、何か懐かしい思いがします。とろりと燃える夏炉の深山寺を訪れたいと思いました。（よし女）

61 泳がざる教師八方睨みかな

61.1 波出石品女

プールで泳いでいる生徒の安全確認のために四方八方へ目を配って睨みをきかせている教師像である。炎天下なので教師自身も生徒達と一緒に泳いでゆみたいという誘惑もあるだろうにと同情している気分もある。低学年の生徒の場合は特に心配で真剣な教師の眼差しが見えてくる。このようなシーンではおおよそ使われないと思われる「八方睨み」の措辞が新鮮である。（みのる）

- プールサイドを回りながら四方八方に気を配っている教師像。八方睨みの措辞が効果抜群です。（よし女）

- プールとか水遊びとか説明しなくとも、その情景がいろいろと目に浮かんでくるのが凄いいと思います。作者は子供の安全を守るという教師の真剣な姿に感動したのでしょうか。（さつき）
- 学校のプールサイドで生徒たちを見守っておられる先生の真剣な様子を八方睨みとは言い得て妙だと感心しました。（よし子）

62 雑魚寝させられたる枕明易し

62.1 波出石品女

雑魚寝であろうとお構いなく寝られる人と他人の鼾が気になって寝られないタイプとがあるが、作者は後者である。うたた寝のような浅い眠りのままに朝窓が白らじんできたということであるが、どのようなシチュエーションであるかは鑑賞者の連想に委ねられている。昔、何人かの句輩と一緒に六甲山の山小屋を借りて、徹夜で俳句鍛錬会をしたことがある。1時間刻みで10句という句会を何度も繰り返すのである。そのうち一人二人と討ち死にして雑魚寝のまま夜が明けるのである。ぼくはそんなシーンを連想したが、トラブルか緊急の対応のために帰宅できず、やむなく小さい部屋で雑魚寝で夜を明かしたというケースも考えられる。（みのる）

- 「雑魚寝させられたる枕」という言葉で作者としてはあまり好ましくない状況なのでしょう。枕に焦点を当てていることに私もユニークだと思いました。伊吹山ツアーで大阪までフェリーで雑魚寝して振動とエンジン音で一睡もできず、美しい夜明けの空を眺めたのを思い出しました。（さつき）
- 登山での山小屋1泊、かいこ棚とか言っていましたがこれこそ雑魚寝でした。枕元の荷物や鼾などでうとうとと夜が明けた事を思い出します。いづれにしても「枕明易し」の措辞が練れていると感心しました。（よし女）
- 枕に視点を合わせた処がユニーク。一直線に並んで窮屈そうだった枕が朝にはどんなになっていたのでしょうか。以外とお行儀よく並んでいたか？あちこち向き向きに散らばっていたか？窮屈で寝苦しい夜も又楽しい旅の思い出。5人姉妹の私達は子連れで里に帰るとこんな風でした。弾む話に一層短い夜でした。（菜々）

GH 秀句鑑賞 (品女俳句に学ぶ)

Copyright (C) 2015 やまだみのる.

<http://gospel-haiku.com/>

minoru@gospel-haiku.com